

しんぱん
新版

しどうようもんしゅう
指導要文集

だいいっしょう

第一章

しんじん

信心の基本

きほん

ごほんぶつ

御本仏の境界・

きょうがい

確信

かくしん

にほんこく

知

もの

にちれんいちにん

日本国にこれをしれる者、ただ日蓮一人なり。

かいもくしやう

じやう

005 開目抄（上・下）

ごほんぶつ

きやうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信70ページー4行

さくさくけんひんずい

ひんずい

とううんぬん

にちれん

「数々見擯出（しばしば擯出せられん）」等云々。日蓮、

ほけきよう

たびたび

流

さくさく

にじ

法華經のゆえに度々ながされずば、「数々」の二字いかん

にじ

てんだい

でんぎよう

読

たま

がせん。この二字は天台・伝教もいまだよみ給わず。い

よにん

まつぼう

はじ

証

くふあくせ

なか

わんや余人をや。末法の始めのしるし「恐怖惡世の中」の

きんげん

合

にちれんいちにん

読

金言のあうゆえに、ただ日蓮一人これをよめり。

かいもくしよう

じよう

005 開目抄（上・下）

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 73 ページ 8 行

きようもん

わ

みふごう

経文に我が身符合せり。

ごかんき

被

御勘氣をかばれば、いよいよ悦

よろこ

増

びをますべし。

かいもくしょう

じょう

(005 開目抄 (上・下))

ごほんぶつ

きょうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 74 ページ 2 行

ばんなん 捨 万難をすてて道心あらん者にしるしとどめてみせん。
どうしん もの 記 留

005 開目抄（上・下）
かいもくしょう じょう

ごほんぶつ きょうがい かくしん 御本仏の境涯・確信 94ページー16行

とうせいにほんこく

だいいち

と

もの

にちれん

いのち

当世日本国に第一に富める者は日蓮なるべし。

命は

ほけきよう

な

こうだい

とど

法華経にたてまつり、名をば後代に留むべし。

かいもくしよう

じよう

005 開目抄（上・下）

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信101ページー7行

いま

じだい

にほん

くに

と

にちれん

いのち

今の時代、日本の国でもつとも富めるものは日蓮です。

命は

ほけきよう

ささ

な

みらい

のこ

法華経に捧げ、名を未来に残していくのです。

にちれん

もの

こぞのとしくがつじゅうににちねうしるとき

くび刎

日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑時に頸はねられ

こんばく

さどのくに

かえ

とし

にがつ

ぬ。これは魂魄、佐土国にいたりて、返る年の二月、

せつちゆう

記

うえん

でし

送

雪中にしるして有縁の弟子へおくれれば、おそろしくてお

見

ひと

怖

そろしからず。みんないかにおじぬらん。

かいもくしよう

じよう

005 開目抄（上・下）

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 102 ページ 8 行

にちれん

きよねん

ぶんえいはちねん

くがつじゅうににちねうし

とき

日蓮というものは去年（文永八年）の九月十二日子丑の時

やはん

ほんぶ

にくしん

たつ

くち

（夜半）にくびをはねられました。（すなわち凡夫の肉身は竜の口に

たき

くおんがんによ

じじゅうほうしんによらい

おいて断ち切られ、久遠元初の自受用報身如来とあらわれたので

さど　くに　るざい

よくねん　にがつ　ゆきぶか　きせつ

す)。そして佐渡の国へ流罪されて、翌年の二月、雪深い季節にこの

しよ　かいもくしよう　したた　えん　でし　おく　しよ

書（「開目抄」）を認めて、縁のある弟子へ送るのです。この書

はい　ひと　まつぼう　しやうほう　ひろ　お　だいなん

を拝する人は、末法に正法を弘めゆくときにならず起こる大難

いちおうおそ　みやうほうぐつう　けつ　なに　おそ

を一往恐れるでしょうが、妙法弘通の決意がかたければ何を恐れ

けつしん　ひと　おそ

ることがありましようか。しかし、その決心のない人はどれほど恐

れることでしょうか。

せん せん せん 捨 たま しよなん 遭 しんみよう

詮ずるところは、天もすて給え、諸難にもあえ、身命を

ご しんし ろくじつこう ぼさつ ぎよう たい こつげん

期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の

ばらもん せ た くおん だいっう もの さん ご

婆羅門の責めを堪えざるゆえ。久遠・大通の者の三・五の

じん 経 あくちしき あ ぜん つ あく

塵をふる、悪知識に値うゆえなり。善に付け悪につけ、

ほけきよう 捨 じごく べう だいがん た

法華経をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。

ひほんこく くらい 譲 ほけきよう かんぎようとう

日本国の位をゆずらん、法華経をすてて観経等について

ごしよう 期 ふ ぼ くび は ねんぶつもう

後生をごせよ、父母の頸を刎ねん、念仏申さずばなんどの

しゅじゅ だいなんしゅつたい ちしや わ ぎ もち

種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用い

ほか だいなん かぜ まえ ちり われにほん

じとなり。その外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の

はしら

われにほん がんもく

われにほん たいせん

柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とな

とう 誓 ねが 破

らん等とちかいし願いやぶるべからず。

かいもくしょう じょう

(005 開目抄 (上・下))

ごほんぶつ きょうがい かくしん

御本仏の境涯・確信 114 ページ 1 行

しよてんぜんじん かご

ろん

(諸天善神の加護があるかないかを論じてきたが) つまるところ

しよてんぜんじん にちれん みす

みす

諸天善神も日蓮を見捨てらるならば見捨てなさい。たとえどのような
なん しんみよう しょうほうぐつう まいしん

難にあつたとしても、身命をなげうつて正法弘通に邁進するのみ

しやりほつ ろくじつこう なが あいだぼさつぎよう つ

とちゅう

です。舍利弗が六十劫という長い間菩薩行を積みながら、途中

たいてん ばらもん しやりほつ め ほ せ

た

で退転したのは、婆羅門が舍利弗の目を欲しいと責められたのに耐え

くおんごひやくじんてんごう

さんぜんじんてんごう

られなかつたためです。また久遠五百塵点劫および三千塵点劫の

むかし ほけきよう げしゅ う

もの さんぜんじんてんごう ごひやくじんてんごう あいだ

昔に法華経の下種を受けた者が三千塵点劫や五百塵点劫の間

あくどう くる

じようたい

しゅぎようちゆう あくちしき

悪道（苦しみの状態）におちていたのも、修行中に悪知識

ぶつどうしゅぎよう

たいてん

よ

（仏道修行を妨げる者のこと）にあつて退転したからです。善き

わる

ほけきよう す

じごく

お

こうい

につけ悪いことにつけ法華経を捨てることは地獄に堕ちる行為です。

いま いっしょうじようぶつ

しょうほうる ふ

だいがん た

ほけきよう す

今こそ一生成仏、正法流布の大願を立てましょう。法華経を捨

かんぎようとう

ねんぶつ

しんこう

い

ごしよう

ごくらくじようど

ねが

てて観経等の念仏の信仰に入り後生の極楽浄土を願うならば

にほんこく くらい

ゆうわく

ねんぶつ

とな

日本国の位をゆずろう、との誘惑があつても、また念仏を唱えな

ふぼ くび

きようはく

た

ければ父母の首をはねるとの脅迫があつても、その他のいろいろな

だいなん

ちしや

にちれん

た

ほうもん

やぶ

大難がおこつてきても、知者に日蓮の立てる法門が破られないかぎ

ぜったい

た

おし

いがい

りは絶対に他の教えにはしたがうことはありません。それ以外の

だいなん

かぜ

まえ

ちり

わたし

にほん

はしら

大難は風の前の塵のようなものです。私は日本の柱となりましたよ

しゅ

とく

わたし

にほん

がんもく

し

とく

わたし

にほん

う（主の徳） 私は日本の眼目となりました（師の徳） 私は日本

たいせん

おや

とく

とう

しゅししん

さんとく

の大船となりました（親の徳） 等と、主師親の三徳をもつて

まっぼう

ひと

すく

ちか

ぜったい

やぶ

末法のあらゆる人びとを救おうとの誓いは絶対に破ることがないの

です。

にちれん にほんこく しよにん 主 師 親

日蓮は日本国の諸人にしゅうし父母なり。

かいもくしやう じやう

005 開目抄（上・下）

ごほんぶつ きやうがい かくしん

御本仏の境涯・確信 121 ページ 6 行

にちれん にほん

ひと

しゆ

し

おや

日蓮は日本のすべての人にとって主であり、師であり、親である
のです。

ほけきよう

弘

もの

にほん

いつさいしゆじよう

ふぼ

法華經をひろむる者は、日本の一切衆生の父母なり。

しょうあんだいしい

かれ

あくのぞ

すなわ

かれ

章安大師云わく「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が

おや

とううんぬん

にちれん

とうてい

ふぼ

ねんぶつしや

親なり」等云々。されば、日蓮は、当帝の父母、念仏者・

ぜんしゆう

しんごんしとう

しはん

しゆくん

禅衆・真言師等が師範なり、また主君なり。

せんじしろう

(009 撰時抄

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 173 ページー15 行)

かんど

にほん

ちえ

さいのう

しょうにん

たびたび

漢土・日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度々ありし

にちれん

ほけきよう

方 人

こくど

ごうてき

かども、いまだ日蓮ほど法華經のかとうどして国土に強敵

おお 設

もの

がんぜん

こと

にちれん

多くもうけたる者なきなり。まず眼前の事をもつて日蓮は

えんぶだいいち

もの

知

閻浮第一の者としるべし。

せんじしやう

(009 撰時抄

ごほんぶつ

きやうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 199 ページ 3 行)

ぐんだいじようきよう

だいもく

こうせんるふ

じつだいじようきよう

だいもく

権大乘経の題目の広宣流布するは、実大乘経の題目の

るふ

じよ

こころ

ひと

推

流布せんずる序にあらずや。心あらん人は、これをすい

ごんきようるふ

じつきようるふ

ごんきよう

だいもく

しぬべし。権経流布せば実経流布すべし。権経の題目

るふ

じつきよう だいもく

るふ

きんめい

とうてい

流布せば、実経の題目また流布すべし。欽明より当帝に

ななひやくよねん

聞

み

いたるまで七百年、いまだきかず、いまだ見ず、

なんみようほうれんげきよう

とな

たにん

勧

われ

とな

南無妙法蓮華経と唱えよと他人をすすめ、我と唱えたる

ちじん

ひい

ほし 隠

けんおうきた

ぐおう

滅

智人なし。日出でぬれば星かくる。賢王来れば愚王ほろ

じつきようるふ

ごんきよう

止

ちじんなんみようほうれんげきよう

ぶ。実経流布せば権経のとどまり、智人南無妙法蓮華経

とな

ぐにん

したが

かげ

み

こえ

ひび

と唱えば愚人のこれに随わんこと、影と身と、声と響き

とのごとくならん。

にちれん にほんだいいち ほけきよう ぎようじや

日蓮は日本第一の法華經の行者なること、あえて疑い

うたが

なし。これをもつてすいせよ。漢土・月支にも一閻浮提の

かんど がっし いちえんぶだい

うち かた

内にも、肩をならぶる者は有るべからず。

もの あ

(009 撰時抄

せんじしやう

ごほんぶつ きやうがい

御本仏の境涯・確信 199ページー10行)

かくしん

外典に云わく「未萌をしるを聖人という」。内典に云わく

外典に云わく「未萌をしるを聖人という」。

「三世を知るを聖人という」。

よさんど高名

余に三度のこうみようあり。

009 撰時抄

御本仏の境涯・確信 204ページー5行

外典（仏教典以外の書）には「将来に起こるべきことを知る人

を聖人いう」とあります。仏教の教えでは「過去、現在、未来の

三世を知っている人を聖人という」とあります。日蓮には三度の

大功績（三度の予言がすべての中したこと）があります。

されば、現げんに勝れたるを勝れたりといふことは、慢似ににて
大功德だいくどくとなりけるか。

(009 撰時抄せんじしやう)

御本仏ごほんぶつの境涯きやうがい・確信かくしん
207 ページ 11 行

とうせいにほんこく　ちじんとう　もろもろ　ほし　にちれん　まんげつ
当世日本国の智人等は衆の星のごとし、日蓮は満月のご
とし。

（009）
撰時抄　せんじしやう

御本仏の境涯・確信　ごほんぶつ　きやうがい　かくしん
208 ページ 16 行

なむあみだぶつ ゆう なむだいにちしんごん ゆう かんぜおんぼさつ

南無阿弥陀仏の用も、南無大日真言の用も、観世音菩薩の

ゆう いっさい しよぶつ しよきよう しよぼさつ ゆう みな

用も、一切の諸仏・諸経・諸菩薩の用、皆ごとごとく

みようほうれんげきよう ゆう うしな か きようぎよう みようほうれんげきよう

妙法蓮華経の用に失わる。彼の経々は妙法蓮華経の

ゆう か みな 徒 物 とうじがんぜん

用を借らずば、皆いたずらのものなるべし。当時眼前の

理 にちれん なんみようほうれんげきよう ひろ

ことわりなり。日蓮が南無妙法蓮華経と弘むれば、南無

あみだぶつ よう つき 欠 しお 干

阿弥陀仏の用は月のかくるがごとく、塩のひるがごとく、

あきふゆ くさ 枯 こおり にってん 解

秋冬の草のかるるがごとく、氷の日天にとくるがごとく

見

なりゆくをみよ。

御本仏の境涯ごほんぶつ きょうがい

・確信かくしん

257

ページー
ジー
11行

てんだいだいしい

のち ごひやくさい

とお みようどう

うるお

とう

天台大師云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」等

うんぬん こうせんるふ

とき さ

でんぎようだいしい

しょうぞう

云々。広宣流布の時を指すか。伝教大師云わく「正像や

す お

まつぼう

ちか

あ

とううんぬん

まつぼう

や過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り」等云々。末法

はじ

がんぎよう

ことば

じだい

かほう

ろん

の始めを願樂するの言なり。時代をもつて果報を論ずれ

りゆうじゆ

てんじん

ちようか

てんだい

でんぎよう

すぐ

ば、竜樹・天親に超過し、天台・伝教にも勝るるなり。

けんぶつみらいき

（037 顕仏未来記

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 606 ページ 14 行

わ ことば だいまん に

我が言は大慢に似たれども、
仏記を扶け如来の実語を顕

ぶつき たす によらい じつご あらわ

さんがためなり。しかりといえども、日本国中に日蓮を

のぞ き たればと とい ほけきよう ぎようじや

除き去っては誰人を取り出だして法華經の行者となさ

なんじ にちれん そし ぶつき こもう

ん。汝、日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす。あに

だいあくにん

大悪人にあらずや。

けんぶつ みらい き

037 顕仏未来記

ごほんぶつ きようがい かくしん

御本仏の境涯・確信
609 ページ 14 行

みようほう

ごじ

まつぼうるふ

だいびやくほう

じゆせんがい

およそ妙法の五字は末法流布の大白法なり、地涌千界の

だいじ ふぞく

ゆえ

なんかく

てんだい

でんぎようとう

うち

大士の付嘱なり。この故に、南岳・天台・伝教等は内に

かんが

まつぼう

どうし

ゆず

ぐつう

たま

鑑みて、末法の導師にこれを譲つて弘通し給わざりしな

り。

(038

当体義抄

とうたいぎしょう

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

627ページー7行)

にちれん
たとい日蓮、
ふるな
富楼那の弁を得て、
べん
目連の通を現ずとも、
え
もくれん
つう
げん

かんが
勘うるどころ当たらずんば、
あ
誰かこれを信ぜん。
たれ
しん

（
041 顕立正意抄
けんりつしょういしょう

ごほんぶつ
御本仏の境涯・確信
きょうがい
かくしん
639 ページ 13 行

されば、無作の三身とは、末法の法華經の行者なり。
無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華經」と云うなり。

095 御義口伝

御本仏の境涯・確信
1048 ページ 11 行

いま にちれんとう たぐ

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、

だいいりようやく ほんしゆ

大良薬の本主なり。

(095 御義口伝

ごほんぶつ きようがい かくしん

御本仏の境涯・確信

1053 ページ 4 行

まつぼう

ほとけ

ぼんぷ

ぼんぷそう

ほう

末法の「仏」とは、凡夫なり、凡夫僧なり。「法」とは、

だいもく

そう

われ

ぎょうじや

ほとけ

い

題目なり。「僧」とは、我ら行者なり。仏とも云われ、

ぼんぷそう

い

また凡夫僧とも云わるるなり。

(095 御義口伝

ごほんぶつ

きょうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1067

ページー8行)

ほとけ

みち

かなら

しんみよう

捨

こと

仏になる道は、必ず身命をすつるほどの事ありてこ

ほとけ

そうろう

推量

すで きようもん

そ、仏にはなり候らめとおしはからる。既に経文のご

あつく

めり

とうじよう

がりやく

ひんずい

とく「悪口・罵詈」「刀杖・瓦礫」「しばしば擯出せられ

と

目

あ

そうろう

ほけきよう

読

ん」と説かれて、かかるめに値い候こそ法華経をよむに

そうろう

しんじん

ごしよう

頼

て候らめと、いよいよ信心もおこり、後生もたのもしく

そうろう

し

そうら

かなら

おのおの

助

候。死して候わば、必ず各々をもたすけたてまつるべ

し。

098

佐渡御勘気抄

さどごかんきしやう

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1195

ページー11行

ほとけ

みち

いのち

す

仏になる道にはかならず命を捨てるほどのことがあつてははじめ

ほとけ

おも

きようもん

と

あつくめり

て仏になれると思われす。すでに経文に説かれている悪口罵詈

わるくち

とうじようがりやく

かたな

つえ

(悪口をいわれ、ののしられること)、刀杖瓦礫(刀、杖、

かわら こいし

なん

さくさくけんひんずい

す

ところ

お

瓦、小石による難)、数数見擯出(しばしば住む所を追われるこ

にど

るざい

とう

なん

ほけきよう

しんどく

とⅡ二度の流罪)等の難にあつてきたことは、まさに法華経を身読

しんじん

ごしよう

おも

したことになる、ますます信心もおこり、後生もたのもしく思わ

し

ひとりひとり

でし

だんな

たす

れます。死んでいったとしても、かならず一人一人の弟子、檀那を助

けてさしあげましょう。

にちれん

もち

日蓮をだに用いぬほどならば、将門・純友・貞任・利仁・

たむら

しょうぐん

ひやくせんまんにん

かな

田村のようなる将軍、百千万人ありとも叶うべからず。

せいちようじだいしゆちゆう

(102 清澄寺大衆中

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1208

ページー3行)

こじま

主

脅

怖

えんまおう

責

わずかの小島のぬしらがおどさんをおじては、閻魔王のせ

ほとけ

おんつかい

名乗

臆

めをばいかんがすべき。 仏の御使いとなのりながらおく

むげ

ひとびと

せんは、無下の人々なり

しゅじゅおんふるまいごしよ

(107種々御振舞御書

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1227 ページー13行)

こじま

にほん

くに

ぬし

しっけん

とう

わずかばかりの小島である日本の国の主（執権）等がおどすのを

おそ

たいてん

じごく

お

えんまおう

せ

恐れているようでは、退転して地獄に堕ちたときに閻魔王に責めら

ほとけ

おんつか

なの

れたならばいったいどうするのですか。 仏の御使いと名乗っておき

いま

おくびよう

ひと

ながら、今さら臆病になったとしたら、それはもつともいやしい人

びとです。

いま にちれん にほんだいいち ほけきよう ぎようじや
今、日蓮は日本第一の法華經の行者なり。その上、身に
いちぶん 過
一分のあやまちなし。日本国の一切衆生の法華經を謗じ
むけんたいじよう 墮
て無間大城におつべきをたすけんがために申す法門な
り。

（しゅじゅおんふるまいごしよ
107種々御振舞御書

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1230ページー10行）

こんや くびき

罷

すうねん あいだねが

「今夜、頸切られへまかるなり。この数年が間願いつる

しやばせかい

雉

とき

ことこれなり。この娑婆世界にして、きじとなりし時は

鷹 摑

鼠

とき 猫

食

たかにつかまれ、ねずみとなりし時はねこにくらわれき。

妻子

み うしな

だいちみじん

あるいはめこのかたきに身を失いしこと、大地微塵より

おお ほけきよう おん

いちど

うしな

多し。法華經の御ためには一度だも失うことなし。され

にちれん ひんどう

み う

ふぼ

こうよう

こころ

足

ば、日蓮、貧道の身と生まれて、父母の孝養、心にたら

くに おん ほう

ちから

こんど

くび

ほけきよう

たてまつ

ず。国の恩を報ずべき力なし。今度、頸を法華經に奉

くどく ふぼ えこう

でしだんな

つて、その功德を父母に回向せん。そのあまりは弟子檀那

とう 省

もう

等にはぶくべしと申せしこと、これなり」

(107 種々御振舞御書

ごほんぶつ きようがい かくしん

御本仏の境涯・確信 1231 ページー7 行)

こんやくび き

い

すうねん あいだねが

今夜首を斬られに行くのです。この数年の間願ってきたことはこ

しやばせかい

きじ

たか

のことです。この娑婆世界において雉となつたときは鷹につかまれ、

ねこ

く

さいし かたき

ねずみとなつたときは猫に食われてきました。あるいは妻子の敵の

いのち

うしな

だいち

ちり

かず

おお

ために命を失つたことは大地の塵の数よりも多いのです。ところ

ほけきよう

いちど

いのち

が、法華経のためにはただの一度も命をなくしたことはありません

にちれん

まず

そうりよ

み

う

ふぼ

でした。そのために日蓮は貧しい僧侶の身と生まれて、父母への

こうよう

おも

くに

おん

ほう

ちから

こんど

孝養も思うようにできず、国の恩を報ずる力もありません。今度

くび ほけきよう

くどく ふぼ えこう

こそ首を法華經にさしあげて、その功德を父母に回向しましょう。そ

でし だんな わ あた

のあまりは弟子、檀那に分け与えましょうといってきたのはこのこと

です。

にちれんもう

ふ 覚

殿 原

よろこ

日蓮申すよう「不かくのとのばらかな。これほどの悦び

笑

をばわらえかし。

(107 種々御振舞御書

しゅじゅおんふるまいごしよ

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1231 ページ 14 行

たつ

くちほうなん

だいしようにん

しよけい

おも

なみだ

なが

(竜の口法難の大聖人の処刑のさい、思わず涙を流した

しじようきんご

たい

にちれん

だいしようにん

ふかく

とのがた

四条金吾に対して) 日蓮(大聖人)が「不覚な殿方ではない

よろこ

か、これほどの喜びはないのだから笑いなさい」といいました。

いま にちれん まつぼう う みようほうれんげきよう ごじ ひろ

今、日蓮は、末法に生まれて妙法蓮華經の五字を弘めて

責

ほとけめつど

のちにせんにひやくよねん

あいだ

かかるせめにあえり。仏滅度して後二千二百余年が間、

おそ

てんだいちしやだいし

いつさいせけん

あだおお

しん

がた

恐らくは天台智者大師も「一切世間に怨多くして信じ難

きようもん

ぎよう

たま

ひんずい

し」の經文をば行じ給わず。「しばしば擯出せられん」

みようもん

にちれんひとり

いっくいちげ

われ

みな

の明文は、ただ日蓮一人なり。「二句一偈、我は皆ために

じゆき

われ

あのくたらさんみやくさんぼだい

うたが

授記す」は我なり。阿耨多羅三藐三菩提は疑いなし。

しゅじゅおんふるまいごしよ

(107種々御振舞御書

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1235

ページー4行)

にちれん

にほんこく

うむ

たと

いえ はしら

日蓮によりて日本国の有無はあるべし。譬え、宅に柱

保

ひと たましい

しびと

にちれん

なければたもたず、人に魂なければ死人なり。日蓮は

にほん ひと たましい

日本の人の魂なり。

(107種々御振舞御書

しゅじゅおんふるまいごしよ

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1238 ページー15行)

にちれん

にほんこく

うむ

そんぼう

き

いえ

日蓮によつて日本国の有無(存亡)は決まるのです。たとえば家

はしら

たも

ひと

たましい

しにん

おな

に柱がなければ保たず。人に魂がなければ死人であるのと同じ

どうり

にちれん

にほん

ひと

たましい

道理です。日蓮は日本の人の魂なのです。

にちれん　ようじゃく　もの

日蓮は幼若の者なれども、法華経を弘むれば釈迦仏の

おんつか

てんしょうだいじん

しょうはちまん

もう

御使いぞかし。わずかの天照太神・正八幡などと申す

くに

おも

ぼんしやく

にちがつ

してん

たい

は、この国には重けれども、梵釈・日月・四天に対すれ

しょうじん

ば小神ぞかし。

（107種々御振舞御書

しゅじゅおんふるまいごしょ

ごほんぶつ

きょうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1239

ページー9行

あくおう しょうほう やぶ じゃほう そうとう かとうど ちしや

悪王の正法を破るに、邪法の僧等が方人をなして智者を

うしな とき ししおう こころ もの かなら

失わん時は、師子王のごとくなる心をもてる者、必ず

ほとけ 成 れい にちれん

仏になるべし。例せば日蓮がごとし。

さどごしよ

(122 佐渡御書

ごほんぶつ きようがい かくしん

御本仏の境涯・確信 1286 ページー1行)

わる けんりよくしや ただ ぶつぼう やぶ

悪い権力者が正しい仏法を破ろうとするのに、あやまった

しゆうきよう そう みかた ちしや

宗教の僧たちがその味方をして、智者をなきものにしようとする

ししおう ゆうき しんじん ひと

ときに、師子王のように勇氣ある信心をもつ人は、かならず成仏

にちれん

することができます。たとえば日蓮のようなものです。

にちれん

かんとう

ごいちもん

とうりよう

にちがつ

ききよう

日蓮は、この関東の御一門の棟梁なり、日月なり、亀鏡

がんもく

にちれんす

さとき

しちなんかなら

お

なり、眼目なり。日蓮捨て去る時、七難必ず起こるべし

さどごしよ

(122 佐渡御書

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1286 ページ 4 行)

にちれん

かんとう

ごいちもん

かまくらほうじようばくふ

とうりよう

日蓮は、この関東の御一門（鎌倉北条幕府）の棟梁

しどうしや

にちがつ

かがみ

がんもく

しょうらい

（指導者）であり、日月であり、鏡であり、眼目（将来をあやま

みさだ

ちゅうしん

ひと

にちれん

もち

りなく見定める中心となる人）であります。その日蓮を用いず

るざい

すさ

ななしゆるい

なん

お

流罪して捨て去ってしまうときには、七種類の難がかならず起こる

でありますよう。

にちれん りんじゅういちぶん うたが
日蓮が臨終一分も疑いなし。頭を刎ねらるるの時は殊
きえつ あ そうろう だいぞく あ だいどく ほうしゆ か おも
に喜悦有るべく候。大賊に値つて大毒を宝珠に易うと思
うべきか。

123 富木殿御返事（諸天加護なき所以の事）

ときどのごへんじ しょうてんかご ゆえん こと
ごほんぶつ きやうがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1293 ページー1行

にちれん

りゆうじゆ

てんじんとう

日蓮、またまたかくのごとし。竜樹・天親等すら、なお

たぐ

とううんぬん

こよう

ほつそう

その類いにあらず等云々。これは誇耀にあらず。法相のし

からしむるのみ。

ゆえ

てんだいだいし

にちれん

さ

い

のち

ごひやくさい

とお

故に、天台大師、日蓮を指して云わく「後の五百歳、遠

みようどう

うるお

とううんぬん

でんぎようだいし

とうせい

こ

い

く妙道に沾わん」等云々。伝教大師、当世を恋いて云

まつぼう

ちか

あ

とううんぬん

わく「末法はなはだ近きに有り」等云々。

さいわ

わみ

ひんずい

もん

幸いなるかな、我が身「しばしば擯出せられん」の文

あ

よろこ

よろこ

に当たること。悦ばしいかな、悦ばしいかな。

ときどのごへんじ

きようもんぶごう

こと

(125 土木殿御返事 (経文符合の事))

御本仏の境涯ごほんぶつ きょうがい

・確信かくしん

1293

ページー1行

しょうにん もう
聖人と申すは、委細に三世を知るを聖人と云う。

(133 聖人知三世事

ごほんぶつ きょうがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1314 ページ 6 行

しょうにん
聖人というのは、くわしく過去・現在・未来の三世を知る人を

しょうにん
聖人というのは。

にちれん いちえんぶだいだいichi しょうにん
日蓮は一閻浮提第一の聖人なり。

（133 聖人知三世事 しょうにんちさんぜじ）

ごほんぶつ きょうがい
御本仏の境涯・確信 かくしん

1315 ページ 4 行

わ で し あ お
我が弟子、仰いでこれを見よ。これひとえに、日蓮が尊貴
なるにあらず、法華經の御力の殊勝なるによるなり。身
あ まん おも み くだ きよう あなど まったか
を挙げれば慢ずと想い、身を下せば經を蔑る。松高けれ
ふじなが みなもとふか なが とお さいわ たの
ば藤長く、源 深ければ流れ遠し。幸いなるかな、楽し
え ど きらく う にちれんひとり
いかな。穢土において喜樂を受くるは、ただ日蓮一人なる
のみ。

（しょうにんちさんぜじ）
133 聖人知三世事

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1315 ページ 8 行

にちれん

せけん

にほんだいいち

まず

もの

ぶつぽう

日蓮は、世間には日本第一の貧しき者なれども、仏法をも

ろん

いちえんぶだいいいち

と

もの

とき

って論ずれば一閻浮提第一の富める者なり。これ、時のし

ゆえ

おも

よろこ

み

かんるいお

からしむる故なりと思えば、喜び身にあまり、感涙押さ

がた

きようしゆしやくそん

ごおんほう

たてまつ

がた

え難く、教主釈尊の御恩報じ奉り難し。

しぼさつぞうりゆうしろう

(141 四菩薩造立抄

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1339 ページー15 行)

にちれん

せけんてき

にほん

いちばんまず

もの

ぶつぽう

日蓮は世間的にみれば日本で一番貧しい者ですが、仏法のうえか

せかいじゅう

と

もの

らみれば世界中でもつとも富める者なのです。このことはひとえに

まつぽう

とき

う

おも

よろこ

からだ

末法という時に生まれたがためであると思えば、喜びは体じゅう

かんき なみだ おさ

きようしゆしやくそん

にあふれ、歓喜の涙は押えがたく、どのようにして教主釈尊へ

ごおん むく

の御恩に報いていけばいいでしょうか。

いま にちれん

今、日蓮、

被

かぼれり。

ほけきよういちぶ

法華經一部よみて候。

そうろう

いっくいちげ

じゆき

一句一偈になお受記を

いちぶ

いかにいわんや一部をやと、いよいよたのも

頼

し。ただ、

てんじゆうきようじゆほうもん

(150 転重軽受法門

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1357 ページ 17 行)

いま ききよう

にほんこく

う

み

かなら

ほけきよう

今この亀鏡をもつて日本国を浮かべ見るに、必ず法華経

だいぎようじゃあ

すで

そし

もの

だいばちあ

の大行者有るか。既にこれを誇る者に大罰有り。これを

しん

もの

なん

だいふくな

信ずる者、何ぞ大福無からん。

そやにゆうどうどのもとごしよ

(162 曾谷入道殿許御書

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1410

ページー2行)

ほけきよう ぎようじや

だいなん 遭 そうろう

悔

法華經の行者としてかかる大難にあい 候は、くやしく

思 そうら

しょう 受 し そうろう

おもい 候わず。いかほど生をうけ死にあい 候とも、こ

かほう しょうじ そうら

さんあくししゆ そうら

れほどの果報の生死は 候わじ。また三悪四趣にこそ 候い

いま しょうじせつだん ぶっか 得 み

つらめ。今は生死切断し、仏果をうべき身となれば、よろ

そうろう

こばしく 候。

しじようきんごどのへんじ ぼんのうそくぼだい こと

(194 四糸金吾殿御返事 (煩惱即菩提の事))

ごほんぶつ きようがい かくしん

御本仏の境涯・確信 1520 ページ 7 行

にちれん おき

こんじょう

祈

ほとけ

成

日蓮は少きより今生のいのりなし。ただ仏にならんと

思

おもうばかりなり

しじょうきんごどのごへんじ

せおうごしよ

(209) 四条金吾殿御返事 (世雄御書)

ごほんぶつ

きょうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1590 ページ 14 行

にちれん わか

こんぜ

ねが

日蓮は若いときから、今世のことを願ったことはありません。た

ほとけ

おも

ねが

だ仏になろうと思ひ願うだけです。

ほとけ だいなん およ すぐ

仏の大難には及ぶか勝れたるか、それは知らず。

りゅうじゆ てんじん てんだい でんぎよう よ かた なら

竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし。日蓮

まつぼう い ほとけ だいもうご ひと たほう じつぼう しょうぶつ

末法に出でずば、仏は大妄語の人、多宝・十方の諸仏は

だいこもう しょうみよう ほとけ めつごにせんにひやくさんじゅうよねん あいだ

大虚妄の証明なり。仏の滅後二千二百三十余年が間、

いちえんぶだい うち ほとけ みこと たす ひと にちれんひとり

一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人、ただ日蓮一人な

り。

(219 しょうにんごなんじ 聖人御難事)

ごほんぶつ きようがい かくしん 御本仏の境涯・確信 1619 ページ 5 行

だいしょうにん う なん しゃくそん なん おな

(大聖人の受けてこられた難は) 釈尊がうけた難と同じか、

おお

りゆうじゅぼさつ てんだい

あるいはもつと大きいか、それはしりませんが、竜樹菩薩、天台

だいし でんぎようだいし

なん わたし だいしようにん

くら

大師、伝教大師がうけた難は私（大聖人）と比べものになりま

にちれん まつぼう う

しゃくそん おお

ひと

せん。日蓮が末法に生まれてこなければ、釈尊は大うそつきの人

しんじつ

しようめい

たほうによらい

じつぼう

しよぶつ

おお

となり、それを真実だと証明した多宝如来や十方の諸仏は、大

ただ

しようめい

しゃくそん

うそを正しいと証明したことになつてしまします。釈尊がなくな

にせんにひやくさんじゅうすうねん

あいだ

せかいじゅう

ほとけ

い

つてから二千二百三十数年の間に、世界中で、仏の言つたこ

じつせん

ほとけ

おし

ただ

しようめい

とをそのとおりに実践して、仏の教えが正しいことを証明し、

たす

ひと

にちれんひとり

助けた人はただ日蓮一人だけです。

にちれん

にほんこく

かみいちにん

しもばんみん

いた

ひとり

日蓮をば、日本国の上一人より下万民に至るまで一人もな

過

くあやまたんとせしかども、今までこうて候ことは、

いま

そうろう

ひとり

こころ

強

ゆえ

思

一人なれども心のつよき故なるべしとおぼすべし。

おとごぜんごしようにそく

(242 乙御前御消息

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1689

ページー17行)

にちれん にほんこく ひとびと ふぼ
日蓮は日本国の人々の父母ぞかし、主君ぞかし、明師ぞかし。
これを背かんことよ。

いちのさわのにゆうどうごしよ
(271 一谷入道御書

ごほんぶつ きようがい
御本仏の境涯・確信
1764
ページー6行

にちれん にほんこく

だいいち

ちゅう

もの

かた

並

ひと

日蓮は日本国には第一の忠の者なり。肩をならぶる人は

せんだい

こうだい

おぼ

先代にもあるべからず、後代にもあるべしとも覚えぬ。

なかおきのにゅうどうしやうそく

273 中興入道消息

ごほんぶつ

きやうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1769

ページー16行

こつしよ　このかた　ふぼ　しゆくんとう　ごかんき　こうむ　おんごく　しま
劫初より以来、父母・主君等の御勘気を蒙り、遠国の島
るざい　ひと　われ　よろこ　み　あま　もの
に流罪せらるるの人、我らがごとく悦び身に余りたる者
よもあらし。

(278 最蓮房御返事

さいれんぼうごへんじ

ごほんぶつ　きようがい　かくしん
御本仏の境涯・確信

1784 ページ 1 行

されば、釈迦・多宝の二仏というも用の仏なり。

みようほうれんげきよう

ほんぶつ

おわ

そうら

きよう

い

妙法蓮華經こそ本仏にては御座しまし候え。經に云わ

によらい

ひみつ

じんつう

ちから

によらい

ひみつ

く「如来の秘密・神通の力」、これなり。「如来の秘密」

たい

さんじん

ほんぶつ

じんつう

ちから

ゆう

さんじん

は体の三身にして本仏なり、「神通の力」は用の三身にし

しゃくぶつ

ぼんぷ

たい

さんじん

ほんぶつ

ほとけ

て迹仏ぞかし。凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は

ゆう

さんじん

しゃくぶつ

しゃかぶつ

われ

しゅじよう

用の三身にして迹仏なり。しかれば、釈迦仏は我ら衆生

しゅ

し

しん

さんとく

そな

たも

おも

のためには主・師・親の三徳を備え給うと思ひしに、さに

そうら

かえ

ほとけ

さんとく

被

たてまつ

ぼんぷ

ては候わず、返つて仏に三徳をかぶらせ奉るは凡夫な

り。

(
280

諸法実相抄
しよほうじつそうしやう

御本仏の境涯
ごほんぶつ きやうがい

・確信
かくしん

1789

ページー6行
)

にちれん まつぼう う

じようぎようぼさつ ひろ たも

日蓮、末法に生まれて、上行菩薩の弘め給うべきところ

みようほう さきだ

弘 作 顕 たも

の妙法を先立ってほぼひろめ、つくりあらわし給うべき

ほんもんじゆりようほん こぶつ しゃかぶつ しゃくもんほうとうほん ときゆじゆつ たも

本門寿量品の古仏たる釈迦仏、迹門宝塔品の時涌出し給

たほうぶつ ゆじゆつぽん ときしゆつげん たも じゆ ぼさつとう つく

う多宝仏、涌出品の時出現し給う地涌の菩薩等をまず作

あらわ たてまつ よ ぶんざい

り顕し奉ること、予が分齊にはいみじきことなり。

にちれん 憎 ないしよう およ

日蓮をこそにくむとも、内証にはいかが及ばん。

しよほうじつそうしよう

(280) 諸法実相抄

ごほんぶつ きようがい かくしん

御本仏の境涯・確信 1790 ページ 3 行

かくのごとく思いつづけて候えば、流人なれども喜悅おも　続　そうら　るにん　きえつ

はかりなし。うれしきにもなみだ、つらきにもなみだ計　無　嬉　涙　辛

り。涙は善惡に通ずるものなり。彼の千人の阿羅漢、仏なみだ　ぜんあく　つう　か　せんにな　あらかん　ほとけ

のことを思いいでて涙をながし、ながしながらおも　出　なみだ　流

文殊師利菩薩は妙法蓮華經と唱えさせ給えば、千人のもんじゆしりぼさつ　みようほうれんげきよう　とな　たま　せんにな

阿羅漢の中の阿難尊者は、なきながら「如是我聞（かくのあらかん　なか　あなんそんじや　泣　によぜがもん

ごときを我聞きき）」と答え給う。余の九百九十九人われき　こた　たも　よ　きゆうひやくきゆうじゆうきゆうにん

は、なくなみだを硯の水として、また「如是我聞」の上みず　みず　によぜがもん　うえ

に「妙法蓮華經」とかきつけしなり。今、日蓮もかくのみようほうれんげきよう　書　付　いま　にちれん

み

みようほうれんげきよう

ごじしちじ

ひろ

ごとし。かかる身となるも、妙法蓮華經の五字七字を弘

ゆえ

しゃかぶつ

たほうぶつ

みらいにほんこく

いつさいしゅじよう

むる故なり。釈迦仏・多宝仏、未来日本国の一切衆生の

留

置

たも

みようほうれんげきよう

ためにとどめおき給うところの妙法蓮華經なりと、かく

われ

き

ゆえ

のごとく我も聞きし故ぞかし。

げんざい

だいなん

おも

続

涙

みらい

じようぶつ

現在の難を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を

おも

よろこ

涙

塞

敢

とり

むし

鳴

思つて喜ぶにもなみだせきあえず。鳥と虫とはなけども

涙

落

にちれん

泣

隙

なみだおちず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。このな

せけん

ほけきよう

ゆえ

みだ世間のことにはあらず。ただひとえに法華經の故な

かんろ

い

り。もししからば甘露のなみだとも云いつべし。

(280) 諸法実相抄

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1792

ページ 4 行

おも つづ

るざい み

かぎ

よろこ

このように思い続けていると、流罪の身とはいえ限りなく喜ばし

ひと

かな

いことです。人はうれしいことにつけても、悲しいことにつけても

なみだ なが

なみだ

ぜんあく

つう

涙を流します。涙というものは善悪のどちらにも通ずるもので

ちゅうりやく

にちれん

しやくそん

のち

でし

す。(中略) いま日蓮も、釈尊がなくなつた後に弟子たちが

しやくそん

なみだ

なが

おな

なみだ

釈尊をしのんで涙を流したのと同じく涙しています。このよう

るざい み

ほけきよう

だいもく

ひろ

みようほう

な流罪の身となつたのも法華經の題目を弘めたためです。その妙法

しやくそん

たほうによらい

みらい

にほん

くに

ひと

とど

は釈尊、多宝如来が未来に日本の国のあらゆる人びとのために留

のこ

みようほうれんげきよう

わたし きようもん

め残してくださったところの妙法蓮華經であると、私も經文ど

き

ほけきよう おし

しゆぎよう

おりに聞いてきたからです。そして、法華經の教えのとおり修行し

けっか

げんざい だいなん

おも

なみだ

てきた結果として、現在の大難にあっていることを思っても涙が

なが

みらい じようぶつ おも

よろこ

なみだ

流れ、未来の成仏を思っても喜びで涙がとめどなくあふれてき

とり むし な

なみだ なが

にちれん な

ます。鳥と虫は鳴きますが、涙は流しません。日蓮は泣きません

なみだ

なみだ せけんいっばん

が、涙のとどまることはありません。この涙は世間一般のことに

ほけきよう

ぎようじや

じっせん

よるのではなく、ただひとえに法華經の行者として実践するため

なが なみだ

かんろ

さいこう

あじ

なみだ

流す涙です。ですから、それは甘露（最高の味）の涙といえるで

しょう。

すで ほけきよう

ごかんき こうむ

さいわ

なか さいわ

既に法華經のために御勘氣を蒙れば、幸いの中の幸い

がりやく

きんぎん か

なり。瓦礫をもつて金銀に易うとは、これなり。

はきいさぶろうどのごへんじ

284 波木井三郎殿御返事

ごほんぶつ きようがい かくしん

御本仏の境涯・確信

1811 ページ 8 行

そもそも、日蓮、種々の大難の中には竜の口の頸の座と

とうじようなん

過

東条の難にはすぎず。その故は、諸難の中には命をすつ

ほど だいなん

罵 責

る程の大難はなきなり。あるいはのり、せめ、あるいは

ところ 追

むじつ い 付

おもて 打

処をおわれ、無実を云いつけられ、あるいは面をうたれ

もの 数

しきしん にほう

起

しなどは物のかずならず。されば、色心の二法よりおこり

謗

もの

にほんこく

なか

にちれんいちにん

てそしられたる者は、日本国の中には日蓮一人なり。

うえのどのごへんじ

とうじようなん

こと

324 上野殿御返事（刀杖難の事）

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1888 ページ 6 行

にちれん

だいなん

たつ くち ざ

およそ日蓮がうけたさまざまな大難のなかでも、竜の口の座と、

とうじようかげのぶ

こまつばら

ほうなんいじよう

だいなん

東条景信におそわれた小松原の法難以上の大難はありませんでし

おお

なん

いのち

す

た。そのわけは、多くの難のなかでも、ほかには命を捨てるような

だいなん

わるくち

せ

す

大難はなかったからです。悪口をいって責められ、あるいは住んで

おだ

むじつ

つみ

かお

う

いるところを追いつけられ、無実の罪をいいつけられ、あるいは顔を打

しきしん

たれたことなどは、たいしたことではありません。したがって、色心

にほう

ほけきよう

じっせん

ひなん

もの

にほんこく

の二法にわたって法華經を実践したために非難された者は、日本国

にちれんひとり

のなかでは日蓮一人だけなのです。

かんじほん はちじゅうまんおくなゆた ぼさつ いくどうおん にじゅうぎよう げ

勸持品に八十万億那由他の菩薩の異口同音の二十行の偈

にちれんいちにん 読

たれ い

にほんこく

とうど

てんじく

は、日蓮一人よめり。誰か出でて、日本国・唐土・天竺、

さんごく

ほとけ

めつご

読

ひと

われ 読

三国にして、仏の滅後によみたる人やある。また我よみ

名乗

ひと

おぼ

たりとなのるべき人なし。また、あるべしとも覺えず。

とうじよう

くわ

とうじよう

に じ

なか

「および刀杖を加う」の「刀杖」の二字の中に、もし

つえ

じ

遭

ひと

かたな

じ

遭

ひと

「杖」の字にあらう人はあるべし。「刀」の字にあいたる人

聞

ふきようぼさつ

じようもく

がしやく

み

つえ

をきかず。不輕菩薩は「杖木・瓦石」と見えたれば、杖

じ

遭

かたな

なん

聞

てんだい

みようらく

でんぎようとう

の字にあいぬ、刀の難はきかず。天台・妙楽・伝教等

とうじよう

くわ

み

欠

は「刀杖も加えず」と見えたれば、これまたかけたり。

にちれん

とうじよう

にじ

遭

かたな

日蓮は「刀杖」の二字ともにあいぬ。あまつさえ、刀の

なん

さき もう

とうじよう

まつばら

たつ

くち

難は、前に申すがごとく、東条の松原と竜の口となり。

いちど

遭

ひと

にちれん

にど

つえ

なん

一度もあう人なきなり。日蓮は二度あいぬ。杖の難には、

少

輔

房

面

打

だいご

まき

すでにしようぼうにつらをうたれしかども、第五の巻をも

打

打

つえ

だいご

まき

打

い

きようもん

つてうつ。うつ杖も第五の巻、うたるべしと云う経文も

ご まき

ふしぎ

みらいき

きようもん

五の巻、不思議なる未来記の経文なり。

うえのどのごへんじ

とうじようなん

こと

324 上野殿御返事（刀杖難の事）

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1890

ページー11行

にちれん

ぶっか

得

日蓮、仏果をえんに、いかでかしようぼうが恩をすつべき

ほけきよう

ごおん

つえ

や。いかにいわんや、法華経の御恩の杖をや。かくのごと

おも

続

そちら

かんるい 押

く思いつづけ候えば、感涙おさえがたし。

うえのどのごへんじ

とうじようなん

こと

324 上野殿御返事（刀杖難の事）

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1891

ページー11行

そ だいじ ほうもん もう べち そうら とき あ
夫れ、大事の法門と申すは別に候わず。時に当たつて、
わ くに だいじ すこ かんが 違
我がため国のため大事なることを少しも勘えたがえざる
ちしや そうろう ほとけ もう かこ
が、智者にては候なり。仏のいみじきと申すは、過去
を 勘 え、 未来をしり、三世を知らしめすに過ぎて 候
おんちえ
御智慧はなし。

もうこのつかいごしよ
353 蒙古使御書

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1947 ページ 2 行

にちれん にほんだいいち

不 当

ほつし

ほけきよう

しん

日蓮は日本第一のふとうの法師。ただし、法華經を信じ

そうろう

いちえんぶだいいいち

しょうにん

な

じつぼう

候 ことは、一閻浮提第一の聖人なり。その名は十方の

じようど

聞

さだ

てんち

知

にちれん

でし

浄土にきこえぬ。定めて天地もしりぬらん。日蓮が弟子と

名 乗

たま

あつきとう

知

なのらせ給わば、いかなる悪鬼等なりとも、よもしらぬ

由

もう

思

よしは申さじとおぼすべし。

361 妙心尼御前御返事 (病之良薬の事)

みようしんあまごぜんごへんじ

びようしりようやく

こと

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1964 ページ 4 行

にちれんいちにん

にほんこく

はじ

とな

ただ日蓮一人ばかり日本国に始めてこれを唱えまいらする

い

けんちようごねん

なつ

頃

いま

にじゅうよねん

こと、去ぬる建長五年の夏のころより今に二十余年の

あいだ

ちゆうやちようぼ

なんみようほうれんげきよう

とな

間、昼夜朝暮に南無妙法蓮華經とこれを唱うることは

いちにん

ねんぶつもう

ひと

せんまん

よ

むえん

もの

一人なり。念仏申す人は千万なり。予は無縁の者なり。

ねんぶつ

かとうど

うえん

こうき

しし

こえ

念仏の方人は有縁なり、高貴なり。しかれども、師子の声

いっさい

けもの

こえ

うしな

とら

かげ

いぬおそ

にってんひがし

には一切の獣、声を失う。虎の影には犬恐る。日天東

い

ばんせい

ひかり

あとかた

ほけきよう

ところ

に出でぬれば、万星の光は跡形もなし。法華經のなき所

みだねんぶつ

なんみようほうれんげきよう

にこそ弥陀念仏はいみじかりしかども、南無妙法蓮華經の

こえしゅつたい

しし

いぬ

にちりん

ほし

ひかり

声出来しては、師子と犬と、日輪と星との光くらべのご

とし。

譬^{たと}えば、

鷹^{たか}と雉^{きじ}とのひとしからざるがごとし。
等

379

松野殿後家尼御前御返事
まつのどののごけあまごぜんごへんじ

御本仏の境涯・確信
ごほんぶつ きようがい かくしん

2003

ページー6行